

第2章 看護の意味 1. 生命維持にかかわる日常的・習慣的ケア

大病や手術などで入院したり、高齢になって意欲が低下したりすると自分の意志通りにできなくなります。自分で自分の習慣的な行動を保てない苦痛は、病気それ自体の症状よりも辛いということは、決して珍しいことではありません。実は、看護の基本はこのような方たちのお世話を専門的に行うことにあるといってもよいのですが、現在の病院では、必ずしも充分に行えているとは言えず、一般の方たちもこれが専門的な看護師の仕事であると理解されていないのではないのでしょうか。

顔を洗ったり口をゆすいだり、食事の世話やトイレの介助など、どれをとってみても、あまりにも日常的でありふれた営みであるために、専門職の仕事などと理解されなくても仕方がないのかもしれませんが、しかし、このごくありふれた営みを支障なく行えることが、病気と闘う気力を生み出し、その人自身の治る力を発揮するうえでとても重要なのです。

「看護の力」は、注射や薬のような外部からの力ではなく、その人に本来備わっている治る力を上手に引き出すことにあります。そして、それらの方法は、看護師がリードせずとも自分自身でマスターして実行すればよいことも多くあります。とくに、昨今の生活習慣由来の多くの成人病は、ライフスタイルを変えることとセルフケアによって予防が可能です。そうは言っても、「わかっちゃいるけど止められない」といった人間の本性は無視できません。正しい方法を知ってもこれを実践することは大変難しいともいえます。専門的な看護の領域でも、健康増進や疾病予防のための意識や行動を変容することは、最も難しいアプローチでもあるのです。(674字)

(川嶋みどり：看護の力. 岩波新書；2012. p.48-49)